

易經故經全集

しまねとしね ぜんしゅうだいの
島尾敏雄全集 第12巻

一九八一年一月二五日発行

著者 島尾敏雄

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一〇二一

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六一六二七九九

堀内印刷・美行製本

© 1981 Toshio Shimao

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〔検印廃止〕落丁・乱丁本はお取替えいたしません

島尾敏雄全集

第 12 卷

島尾敏雄全集第12卷・目次

東北と奄美の昔ばなし	7
東北の昔ばなし	
地蔵の耳	10
正直正兵衛	18
縁結びの神様	25
ほととぎす	32
笛市	38
壺の宝	45
奄美の昔ばなし	
蛇性の姉	54
猫女房	57

	妹と妻	60
	夫と妻	63
	舌切り娘	65
	三人の娘	67
	継母継娘	69
	二人のわかもの	71
	三人兄弟	73
	奄美のユリワカ	75
	鬼と四人の子ら	78
	*	
	奄美伝説十一選	85
	島建て国建て	87
	天人天降れ	94
	為朝伝説	102
	平家伝説	110
	按司根津栄	124

ネータラとウシシギヤ父子

与湾大親

野茶坊

当濟

じょーごの川

今女

*

徒然草（現代語訳）

169

165 159 153 148 140 133

ブックデザイン 平野甲賀

東北と奄美の昔ばなし

東北の昔ばなし

地蔵の耳

昔々、東北のある村に、それはそれは仲の良いおじいさんとおばあさんが居りました。あるとき、「おじいさん、おじいさん」とおばあさんが言いました。「もしおじいさんがわたしより先に死んだら、わたしはすぐ、おじいさんのあとを追っかけて死にますよ」

するとおじいさんもこう言いました。

「おばあさん、そりゃわしだって同じことさ。おばあさんが先に死ねばわしはすぐそのあとを追っかけて死にますよ」

ところが、それから間もなく、おばあさんはぼっくり死んでしまいました。

おじいさんはどんなに悲しんだことでしょう。おばあさんが死んでしまった世の中なんて、おじいさんは考えてみることも出来なかつたことなのに、本当におばあさんが死んでしまっても、この世の中はやはり動いていますし、自分も相変らずこの世の中に生きていることを覚りました。

「おやおや、とんだことになってしまったものだ。一体これから先どうして暮して行ったらよいだら

う」

しかしとにかく、お葬式も出さなければならず、そのとき色々と手伝ってくれた近所の人たちにお礼もしなければならず、そんなこんなで、半月ばかりはまたたくまに過ぎてしまいました。

そうするうちに、おばあさんに先立たれた悲しみもだんだんうすらぎ、一人でも何とか結構生きて行けることに気がつきました。

「これはしたり、おばあさんがいなくなっても、何とかやっつてはいけるものだ」とおじいさんは思ったのです。

ただ一つ、おじいさんの気がかりなことは、おばあさんが生きているときに、おばあさんと約束したあのことです。

あのときおじいさんはこう言ったものです。

「おばあさん、そりゃわしだって同じことさ。おばあさんが先に死ねば、わしはすぐそのあとを追っかけて死にますよ」

しかしおじいさんは、なかなか死にそうではありませんでした。

ある夜中のことです。

となりむらに、用足しに出かけて行ったその先で、御馳走になったその上に、ひょうたんの酒とおにしめの折づめまで貰って帰りのおそくなった二人の若者が、おじいさんの家の前を通りかかりました。家の中にはまだあかりがついていました。それを見て、背の高い方の甲助が、「あんなに仲のい

いじいさんばあさんもめったにないことだ」と言うと、もう一人の乙吉も、「ほんとだほんとだ、とにかく珍らしいいじいさんばあさんだったよ」と相槌を打ちました。「いいことは、そうそう続かないと見えるな。ばあさんがぼっくり死んでしまったじゃないか」

「寿命には勝てないかな」

「それにしてもいじいさんは寂しいだろう」

そんなことを言いながら通り過ぎようとしたが、甲助はいたずらっぽく、にやにや笑いを浮かべたと思うと、ふと立ち止り、

「乙吉君、いいことを思いついたよ」と言いました。「丁度貰って来たこのお酒と御馳走で、ひとついじいさんをからかってみようか」「うん、そいつは面白そうだ」と乙吉もすぐ賛成しました。

そこで二人が戸口に近寄って行くと、家の中からは、いじいさんのいかにも楽しそうな笑い声がきこえて来たので、何か勝手が違った面持で二人は思わず立ち止まりました。きっとおじいさんはひとりぼっちでひっそりしているだろうと思って来たところが、案に相違して、家の中からはうれしそうな高笑いひびいて来たのですから。

二人は家の中の様子をうかがいました。

どうしてもおじいさん一人だけではなさそうなのです。声はおじいさんの声しかきこえて来ませんが、それはおじいさんのひとり言ではなく、確かに誰か相手がいって話しかけている様子です。不思議なことには相手の声が一向にきこえて来ないことです。

二人はへんに思っ、戸のすき間からそっと中をのぞいてみました。

これはしたり、何ということでしょう。

囲炉裡ばたで、おじいさんのお酒の相手をしているのは、死んだおばあさんの化物ではありませんか。しかもそのおばあさんの化物は物すごい形相で今にもおじいさんにつかみかからんばかりなのに、おじいさんはそれと気がつかず、さかんにおばあさんに話しかけてはにこにこしているのです。

それを見た二人の若者は危うく腰を抜かすところでした。

これはきつと何かわけがあることに違いない。放っておけば、おじいさんは、あの化物にとり殺されてしまうだろうと思いましたが、どうすることもならず、とにかくその場はそのままにして、一旦それぞれの家に帰りました。

翌日、二人の若者は誘い合わせておじいさんの所に行きました。

そして始めはお天気の話や世間話をしながら、何気ないふうに昨夜のことをきいてみました。

するとおじいさんは、「実は皆さんに喜んで貰いたいことがあるんですよ。それはうちのばあさんが生き返って来ることになりました」とすまして言うのです。

二人の若者は顔を見合わせました。

おじいさんはおばあさんの生き返ってくることについて、真顔でいろいろくわしい話を二人にしてきかせました。

おばあさんは、おじいさんを残してはどうしても死にきれないので、仏様にたのんでみたところが、おばあさんが三七二十一日の間おじいさんの所に通って行って、その間おじいさんがどこにも行かな

ければ、もう一度生き返らせてやると言われたというのです。

それでおばあさんは毎晩通って来て、ゆうべで二十日目なので、あと今夜一晩さえ迎えてやれば、おばあさんが生き返るといふのです。

二人は又顔を見合わせました。

どうもへんな話に思えてなりません。そんなことはとても信ずる気にはなれませんが、たとえそうだとしても、おばあさんの化物はどうしてあんなに物すごい形相をしていたのでしょうか。

「おばあさんは生きていた時とちっとも変わっていなくて、昔の通りとても親切ですよ」とおじいさんは言うのです。

そこで二人は、はたとひざを打ちました。

おじいさんはおばあさんの真の姿、つまり化物のかたちが見えないでいるのです。

そこで色々さぐってみると、おじいさんとおばあさんの約束のことをきき出すことが出来ました。

これはきつと、おじいさんが約束を果たさないうために、おばあさんの魂が宙に迷って、その執念がおじいさんを取り殺そうとしているのに違いないと、二人は思いました。

これは大へんです。しかも今夜で三七二十一日があけてしまうのです。このままにしておけば、おじいさんはおばあさんの化物に食い殺されてしまうでしょう。

何よりも先ず、おじいさんの眼を覚まさなければいけない。

そこで、二人が昨夜戸のすき間から見たことの一部始終を話してきかせました。

ところが困ったことには、おじいさんは頑として二人の言うことを信用しないのです。あくまでお

ばあさんの化物の言ったことを信じているのです。

二人は途方にくれました。

しかし何とかしなければなりません。

とうとう、おじいさんをすかしたりおどしたりして、とにかくおじいさんに、戸の外からおばあさんの姿を眺めさせて、どうしても普通のおばあさんであつたら、おじいさんの好きなようにしたらよからうということに話合いがつかまりました。

日がくれると、二人の若者とおじいさんは、庭の物置の中にかくれて家の様子をうかがうことになりました。

夜が次第に更けわたり、いつもおばあさんの化物がやって来る頃とおぼしい時刻になると、家の戸口をとんとん叩く音がきこえました。

「おじいさんおじいさん、わたしだよ、一寸あけておくれ」

いかにもやさしそうに造り声をして、化物は言いました。

三人は物置の戸のすき間からその様子をじっと見ていました。

いくら叩いても返事がないので、化物はいら立って来たらしく、がらりと荒々しい声を出しました。

「あけろ、あけろ、あけないと叩き破るぞ」

それでも返事がないのを見た化物は、やにわに戸をけ破って家の中におどり込みました。

眼はつり上り歯をくいしばった化物の顔のおそろしいことつたらありません。